

非文学専攻者に「英語文学」を講じるということ

高橋 愛

はじめに

文部科学省が提示する「中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コアカリキュラム」の「英語文学」に対応する科目として、大阪公立大学では「英米文学史」が開講されている。本発表では、米文学史がどのように位置づけられてきたかを振り返ったうえ、筆者が担当している「英米文学史 C」での実践を紹介し、「英語文学」対応科目にかかわる課題を示したい。

「米文学史」の位置づけ

授業実践を紹介する前に、これまで米文学史がどのように位置づけられてきたかを確認し、そのうえで授業担当者としての筆者の立ち位置を示したい。

大橋健三郎らは、文学史を「今後に展開されてゆくであろう、新しいアメリカ文学研究、ことに若い研究者あるいは学習者のそれに資すべき、基礎的な知識を提供しようとする試み」(i)ととらえている。板橋好枝と高田賢一は、「一国の文学を全体的に把握する方法」や「一人の作家と他の作家、一つの時代と他の時代との関係を明らかにしてくれ、一国の文学の森を探索する手引きとなってくれるもの」(i)と述べている。さらに学習者への手引きという見解として、渡辺利雄は「大学の英文科に入（進）学してきた学生のための道案内」(iii)、諏訪部浩一は読むべきものが分からない人に向けた「ガイドブック」(4)と定義している。

「英語文学」科目の履修者の多くは、読書経験も予備知識もほとんどない状態で、授業で初めて英米文学を体系的に学ぶことになる。¹ 上述した定義や履修者の状況を踏まえれば、米文学史の授業は、米文学の世界を訪れることになった際に自分で旅程を決められるだけの知識を学生に身につけさせるためのものと位置づけられる。

「英米文学史 C」での実践

大阪公立大学では「英語文学」に対応する科目として「英米文学史」が開講されているが、具体的には近世までの英文学を扱う「英米文学史 A」、近現代の英文学を扱う「英米文学史 B」、米文学を扱う「英米文学史 C」という構成で、2年生を配当年次としている。

「英米文学史 C」では「植民地時代から現代にいたる米文学の概要を説明することができる」「歴史的・文化的背景を踏まえながら、特定の作品や文学運動について説明することができる」「米文学作品を原文で読み、理解することができる」の3点を到達目標とし、植民地時代から現代までの米文学についての講義を全15回で行っている。

例年20名程度の学生が履修をしているが、2025年度の履修者は23名で、英語英米文学専修の15名（2年生11名、3年生3名、4年生1名）、それ以外の専修の8名から成る。なお、本学では3年次のゼミ配属を機に学生の専門分野が決まるため、受講者の大多数が英米文学の専攻ではないということになる。また、教職科目を受講している履修者は、過去の傾向を踏まえると、1～2名と推測される。こうした状況から、教職希望かどうかにかかわらず、履修者の多くは米文学には馴染みがないと言える。

各回の授業については、まず出席確認を兼ねて前回の内容に基づく小テストを実施し、前回授業のコメントに対してフィードバックを行い、アメリカンルネサンスやロストジェネレーションといったテーマのもと代表的な作家・作品について、作品の引用等を紹介しながら講義を行い、最後に学生にコメントを書かせるというかたちで実施している。本科目では米文学を網羅的に講じることにしているのだが、コメントへのフィードバックは、授業に双方向性を加える要素として重視している。

非文学専攻者に「英語文学」を講じるうえでの課題

文学史の授業を担当していて感じる課題は、大きく3点ある。それは前提知識の扱い、原典の扱い、「代表的な文学」の扱いをめぐるものである。

1 点目は、高校等での世界史の学習状況と英文学史の履修状況に起因するものである。それぞれの作品に描かれる社会的・文化的背景として世界史、特に欧米史の知識は不可欠であるが、入試科目として選択しなかったため世界史を学習していないと申告してくる学生が実は少なくない。また、特に近代までの米文学では英文学の知識が前提として必要になることが間々あるため、英文学史を先に学習していることが望ましい。しかし、大半の学生は英文学史と米文学史を同時に履修しており、英文学史でまだ学習していない事項が米文学史では前提として語られるということが起こりがちである。このような状況から、本題に入る前に世界史や英文学史の授業で予め学んでいるはずの事項を説明せざるをえなくなっている。

2 点目は、米文学について学ぼうと必要な事項の説明に重きを置いた結果、授業中に原典にあたる時間が少なくなるという問題である。筆者の場合、原典の引用は復習として読んでもおくよう指示をして終わってしまうことも少なくなく、授業中に紹介することができた場合でも引用の朗読にとどまり、解釈を掘り下げることはできていない。なお、原典の読みを学生に任せるという判断ができていないのは、演習形式の科目が別に開講されているからであり、コアカリキュラムで求められる「文学作品における英語表現」の学習はそこで行うことが可能である。しかし、昨今の文学離れの傾向を鑑みると、様々な時代の多様な作品への接触を学生の自主性に任せることには限界がある。文学作品に描き込まれた「多様な文化」や「英語表現」の学習は教室で教員とともに行う方が、教育効果という点でも、学生の興味喚起という点でも望ましいのかもしれない。

3 点目は、「代表的な文学」として取り上げられる作品の時代やジャンル、作家の人種とジェンダーに偏りが生じてしまうことである。米文学を専攻としていない学生が大半を占めている状況から、筆者は「代表的な文学」を評価の定まった古典的作品ととらえて授業の設計をしている。その結果、時代については、米文学が確立していく 19 世紀に重点が置かれることになる。ジャンルは小説に偏り、全 15 回の講義のうち 11 回は小説に関するものになっている。初回のオリエンテーションを除くと、授業で扱う小説以外のジャンルは、歴史記述や説教（第 2 回：ピューリタンの文学）、評論（第 4 回：超越主義）、詩（第 6 回：ウォルト・ホイットマンとエミリー・ディキンソン）である。演劇をテーマとして取り上げた回はなく、南部ルネサンスを取り上げた際にテネシー・ウィリアムズを紹介するにとどまっている。人種とジェンダーに関して言えば、取り上げる作家の多くが白人男性になりがちである。時代やジャンルの偏りは授業担当者の専門に負うものだろうが、人種とジェンダーの偏りは文学史という制度に孕む問題であろう。最後に、「英語文学」関連科目における偏りの問題として、対象とする国をめぐるものも指摘しておきたい。ここで言う国の偏りとは、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドといった英語圏の国や地域が扱われないどころか、イギリスかアメリカのうちの一国しか「英語文学」の対象として扱われない状況を指す。昨今人事ポイントの削減に伴い、採用・昇任の枠を学部内で奪い合っているという大学は少なくない。ポイント争奪戦の末に教員構成が偏り、「英語文学」としては英文学か米文学のどちらかしか学べないという状況がさらに進むことも懸念される。

¹ 履修者の多くが英米文学の読書経験や予備知識に乏しいことは、授業初回に行っているアンケート調査の結果にうかがえる。こうした状況の背景には、前田一平が指摘するような検定教科書での文学作品の扱いも影響しているだろう（前田 20）。

引用文献

板橋好枝・高田賢一編著『はじめて学ぶアメリカ文学史』、ミネルヴァ書房、1991 年。

大橋健三郎・斎藤光・大橋吉之輔編著『総説アメリカ文学史』、研究社、1975 年。

諏訪部浩一編『アメリカ文学入門』初版、三修社、2013 年。

前田一平「教育学部のアメリカ文学史」、『中・四国アメリカ文学研究』第 52 号、2016 年、20-23 頁。

渡辺利雄『講義アメリカ文学史』第 1 巻、研究社、2007 年。